

健康寿命をのぼそう！シンポジウム

「健康寿命をのぼそう！シンポジウム」が、ハロウィーンの飾りつけで賑わう静岡市葵区繁華街にあるクーポール会館にて開催されました。会場には200名程の参加者が集まりました。(写真①②)



①

1



②

2

チラシの副題として～「地域に根ざした研究×県民の協力」が健康寿命延伸のカギ～とあります。(写真③) 今回のシンポジウムでは滋賀県長浜市で行われた研究をモデルケースとして、静岡県の現状について討議が行われました。

開会にあたり静岡県健康福祉部の池田和久部長から挨拶がありました。(写真④)



③

3



4

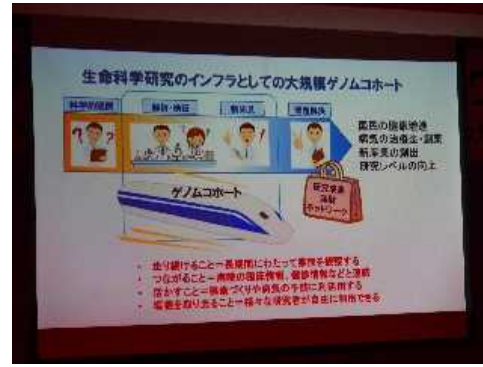
④

第1部は京都大学大学院医学研究科附属ゲノム医学センター長・教授の松田文彦氏より「大規模ゲノムコホートと地域の健康増進への貢献」-ながはま0次予防コホート事業の事例を中心に-のテーマにて基調講演が行われました。(写真⑤⑥)



⑤

5



⑥

6

国民医療費が限りなく増加する中で、治す医療から予防する医療へ目を向けることの重要性、その結果として健康で活力ある長寿社会を構築することとなる背景を述べられました。ヒトの様々な病気を予測できるマーカーを見つけるために、大集団の長期観察と生命ビッグデータ解析が極めて重要とのこと。その事例として滋賀県長浜市で行われた住民1万人を対象に5年ごとに詳細な健康診断と追跡をベースとした20年以上の長期縦断ゲノムコホート研究について紹介いただきました。会場からも熱心な質問があり、関心の高さが窺えました。(写真⑦)



⑦

7



⑧

8

シンポジウム第2部は「静岡県における社会健康医学の推進」がテーマのパネルディスカッションです。会場の最前列には各パネリストが並びました。(写真⑧)

まずはコーディネーターである静岡県立総合病院参与兼リサーチサポートセンター長の宮地良樹氏より、健康寿命延伸のための静岡県の取り組みについて「ふじのくに健康長寿プロジェクト」や「リサーチサポートセンターの開設」の状況などを紹介いただきました。とりわけ社会健康医学を推進していくための人材育成、そのための研究拠点として大学院大学の設立を強調されておりました。(写真⑨)



⑨

9



⑩

10

基調講演された松田文彦氏もパネリストとして再登壇され、「ながはまコホート事業」の経過のまとめとして以下のポイントをあげられました。(写真⑩⑪⑫)

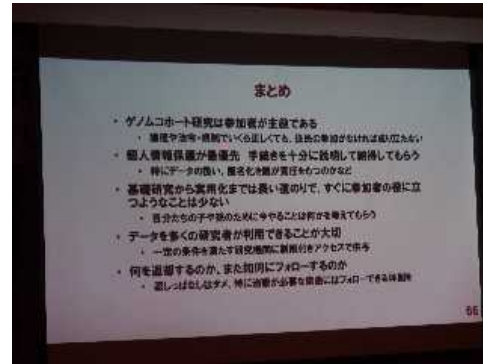
・ゲノムコホート研究は参加者が主役である

- ・個人情報保護が最優先 手続きを十分に説明して納得してもらう
- ・基礎研究から実用化までは長い道のりで、すぐに参加者の役に立つようなことは少ない
- ・データを多くの研究者が利用できることが大切
- ・何を返却するのか、また如何にフォローするのか



⑪

[11](#)



⑫

[12](#)

次のパネリストは静岡県立総合病院副院長(頭頸部・耳鼻いんこう科)の高木明氏で「現代は聾で生まれても聞こえて話せる時代」のテーマで、新生児聴覚スクリーニングや1歳未満で人工内耳を装着することによる健聴レベルの言語力獲得等のデータを示されました。(写真⑬)

続いて静岡県立総合病院副院長(泌尿器科)の吉村耕治氏は「夜間頻尿:何が原因?」のテーマで、夜間頻尿と年齢、生存率との関係やその予防のための因子について血液内物質を解析中であることを述べられました。(写真⑭)



⑬

[13](#)



⑭

[14](#)

パネリスト最後は東京大学大学院医学系研究科医療品質評価学講座特任助教・静岡県立総合病院リサーチサポートセンター研究員である一原直昭氏が「医療・健康ビッグデータ研究とは?」のテーマで述べられました。ビッグデータを成果に結びつけるためにはデータ蓄積と市民への還元が信頼と協力でつながっていることが大切であり、とりわけ個人情報保護との関連を適切に対応することが求められているとのことです。(写真⑮⑯)



[15](#)



[16](#)

⑮

静岡県では県民の健康寿命をのばすために、社会健康医学という研究手法を用いた取り組みが始まっています。社会健康医学は直接病気の治療を研究するのではなく、病気を予防する、病気にならないような地域・環境を研究する学問として近年注目を集めています。今後も静岡県が健康寿命延伸モデルの最先端となるよう期待しています。

⑯

取材：静岡地区担当 生きがい特派員 竹内 章